開善寺境内遺跡

2009年3月

長野県飯田市教育委員会

開善寺境内遺跡

2009年3月

長野県飯田市教育委員会

SD 12－Ⅱ期

SD 12－Ⅰ期・Ⅱ期

土層断面図（A－A′）

土層断面図（B－B′）

遺構外出土陶器

序

飯田市は、豊かな自然に恵まれ、長い歴史と伝統文化をもつまちとして知られています。

これまでの発掘調査による新たな成果から、当地方の古代史がしだいに明らかになりつつあります。これまでわかってきた古代人の足跡を追ってみると、古代人の生活域と現代人の生活域の多くが重なっていることがわかってきましたが、人間の営みの継続性を知るとともに、こうしたなかで埋蔵文化財を残すということの難しさを強く感じます。

今回発掘調査を実施した開善寺境内遺跡の周辺には多くの文化財があり、現在も大事に残されています。重要文化財となっている開善寺山門や県史跡御猿堂古墳や馬背塚古墳などがあります。また、発掘調査によって、縄文時代から連綿と続く人々の営みがあることを知れば知るほど、この地が長い年月の間に様々な土地利用をされながら現代につながっていることを感じます。

今回の発掘調査は、飯田市考古資料館の多目的トイレ建設に先立って行われたものです。飯田市考古資料館建設の際にも事前に発掘調査が行われ、開善寺に関わる可能性もある建物がみつかっています。今回の調査地はその隣接地になります。

失われていく文化財を記録保存という形で残すことは次善の策ではありますが、こうした記録が地域の資源として、有効に活用されることを願うばかりです。

最後になりましたが、発掘調査に際し、多大なるご理解とご協力をいただいた開善寺の皆様、また発掘・整理作業に従事された皆様に、多大なる謝意を申し上げる次第であります。

平成21年3月

飯田市教育委員会
教育長　伊　澤　宏　爾

例　　言

1．本報告書は飯田市考古資料館の多目的トイレ建設に先立ち実施された、飯田市竜丘地区上川路所在の埋蔵文化財包蔵地　開善寺境内遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．発掘調査は飯田市教育委員会が実施した。

3．開善寺境内遺跡における発掘調査位置は国土基本図の区画、LC94－23に位置し、グリット規定は飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、有限会社M２クリエーションに委託した。なお、座標は世界測地系を用いている。

4．開善寺境内遺跡の発掘調査及び整理作業には、略号KZK1002－９を用いた。また、遺構には略号として、竪穴住居址－SB、土坑－SK、溝址－SDを用いた。

5．本書の記載は遺構順とし、遺構ごとに本文・遺構・遺物図を載せ、巻頭及び巻末に写真図版を掲載した。

6．土層観察については、小山正忠・竹原秀夫　1996『新版標準土色帖』による。

7．遺構図において、数字は深さを示す。

8．遺構写真は発掘調査担当者が撮影し、遺物写真は西大寺フォト　杉本和樹氏に依頼した。

9．本書の執筆・編集は澁谷恵美子が行い、山下誠一が総括した。

10．本書に関する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館で保管している。

11．なお、本書作成にあたって長野県埋蔵文化財センター　市川隆之氏にご教示いただいた。

目　　次

本文目次

巻頭図版
序
例　言
目　次

第Ⅰ章　経　過 …… 1
　1．調査の経過 …… 1
　2．調査組織 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の環境 …… 3
　1．自然環境 …… 3
　2．歴史環境 …… 5

第Ⅲ章　調査結果 …… 7
　1．遺跡の状況及び基本層序 …… 7
　2．遺構と遺物 …… 7
　（1）竪穴住居址（SB）
　（2）土坑（SK）
　（3）溝址（SD）
　（4）遺構外出土遺物

第Ⅳ章　まとめ …… 15
　1．縄文時代 …… 15
　2．古墳時代 …… 15
　3．区画溝の性格 …… 16

報告書抄録 …… 21

図版目次

第1図　調査遺跡位置図 …… 2
第2図　調査位置及び周辺遺跡位置図 …… 4
第3図　基準メッシュ調査位置図 …… 8
第4図　調査区全体図及びSD12平面図 …… 11
第5図　調査区土層断面図 …… 12
第6図　SB68・遺構外出土遺物 …… 14

写真図版目次

巻頭図版1　SD12－Ⅰ期・Ⅱ期
巻頭図版2　土層断面図（A－A′・B－B′）
巻頭図版3　遺構外出土陶器
図版1　SD11・SD12 …… 19
図版2　SD12－Ⅰ期覆土断面・
　　遺構外出土土器 …… 20

第Ⅰ章　経　　過

1．調査の経過

平成19年６月13日付、飯田市大久保町2534番地　飯田市長　牧野光朗（飯田市教育委員会）より、飯田市上川路1002－9他における「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知」が提出された。工事計画は飯田市考古資料館の多目的トイレを建設するものである。

工事計画地は埋蔵文化財包蔵地　開善寺境内遺跡にあたる。同遺跡は、これまでに実施された発掘調査で縄文時代から奈良・平安時代に至る集落址および中世～近世の墓址が確認されている。また、隣接地の飯田市考古資料館建設に先立つ発掘調査では中世の建物址が確認されている。

さらに、古墳時代には周辺に横穴式石室を有する前方後円墳である御猿堂古墳や馬背塚古墳があるほか、白鳳時代の瓦の出土から古代寺院（上川路廃寺）の存在が想定され、現在は古刹開善寺がある。

前述のような状況から、工事実施前に発掘調査による記録保存を図ることとなった。

平成19年６月19日より現地における発掘調査を実施した。作業員による表土剥ぎを行い、同月25・26日に飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づく測量作業を委託実施した。引き続き遺構の掘り下げ作業を開始した。遺構の確認・掘り下げ・実測・写真撮影を順次行い、７月18日に現地での発掘作業をすべて終了した。引き続き、飯田市考古資料館において、出土遺物や図面・写真類の整理を行った。

平成20年度は、同館において出土遺物の注記・接合復元・実測・写真撮影や遺構・遺物のトレース・版組等の各作業を行い、本報告書を刊行した。

2．調査組織

（1）　調査団

調査主体者　飯田市教育委員会　教育長　伊澤　宏爾

調査担当者　澁谷恵美子

調　査　員　山下　誠一　下平　博行　坂井　勇雄　羽生　俊郎

作　業　員　伊東　裕子　金井　照子　木下　貞子　木下　義男　小平まなみ
関島真由美　竹本　常子　中田　　恵　中平けい子　仲村　　信
中村地香子　樋本　宣子　福沢　育子　松本　恭子　宮内真理子
森藤美知子　森山　律子　吉川　悦子

（2）　事務局

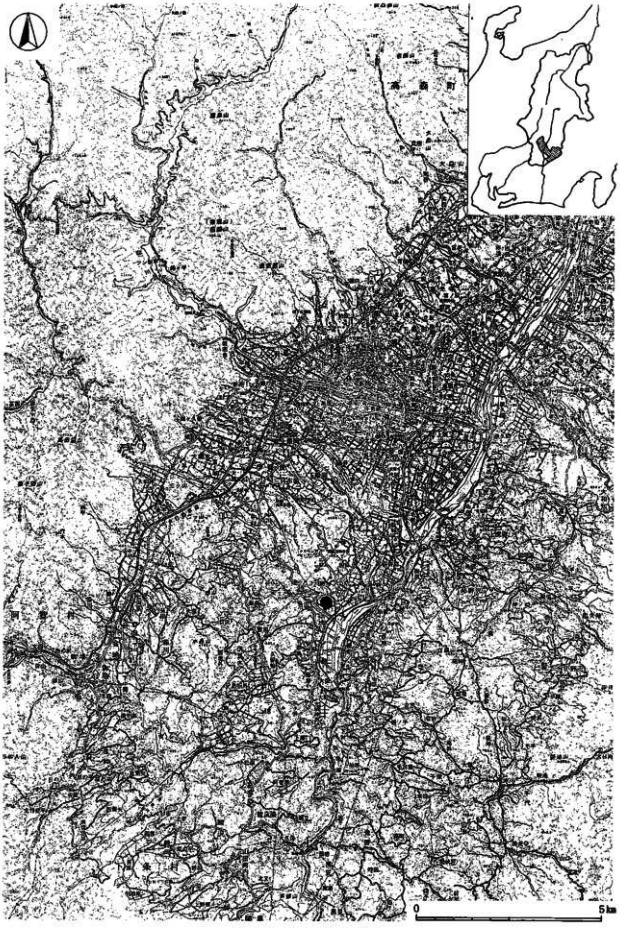
飯田市教育委員会

教育次長　関島　隆夫

生涯学習・スポーツ課長　宇井　延行

生涯学習・スポーツ課文化財保護係長　山下　誠一

生涯学習・スポーツ課文化財保護係　宮澤　貴子　澁谷恵美子　下平　博行
坂井　勇雄　羽生　俊郎



第１図　調査遺跡位置図

第Ⅱ章　遺跡の環境

1．自然環境（第1図）

飯田市は長野県の南部を並走する木曽山脈（中央アルプス）と、赤石山脈（南アルプス）の前山である伊那山脈に挟まれた伊那谷の南端、飯田盆地に位置する。伊那谷の中央には天竜川が南流し、国内でも有数の段丘地形を形成している。伊那谷は南北に約100㎞と長く、北は諏訪地方・塩尻地方に接する。また南は天竜川伝いに遠州地方に、西は木曽山脈を隔てて三河地方にそれぞれ通じており、飯田市は長野県の南の玄関口といえる場所にある。

伊那谷の基盤地質は領家帯に属す花崗岩・片麻岩である。一方伊那谷の東、伊那山脈と赤石山脈の間には中央構造線が走っており、三波帯・戸台構造帯・秩父帯・四万十帯が赤石山脈を構成している。この秩父帯・四万十帯から産する硬砂岩・緑色岩・チャート等の堆積岩は、三峰川・小渋川を伝って天竜川河床に分布し、旧石器時代以来、石器の材料として長く利用されている。

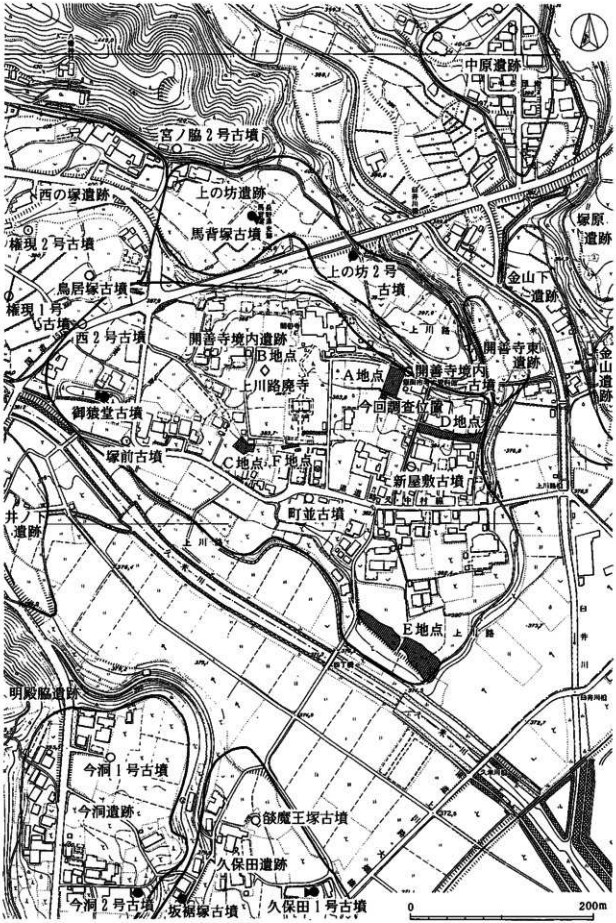
伊那谷の形成は、約250万年前に天竜川が流れ始めたことから始まる。伊那谷特有の段丘地形は赤石・木曽両山脈が隆起するに伴い、沖積地との間に形成された逆断層によるものである。この段丘は下伊那の地質図（1976）によると、高位面、高位段丘・古期扇状地、中位段丘・中期扇状地、低位段丘Ⅰ・新期扇状地、低位段丘Ⅱの５つに大きく編年されている。

気候からみると、飯田市の年間平均気温は12℃を超え、２月の平均気温は1.4℃、８月の平均気温は24.4℃と寒暖の差が激しく、内陸性の気候を示す。一方降水量からみれば年間約1600㎜、梅雨と台風シーズンにピークを迎え、冬には少なく太平洋岸式気候に属するといえる。

こうした地理的・気候的条件により、飯田下伊那地方には暖地性から亜高山性まで多種多様な動植物がみられる。植物の水平分布からみると暖地性と温帯性の接点にあたり、特に照葉樹林が存在することは県下の他地域と大きく異なっている。

開善寺境内遺跡が所在する竜丘地区は飯田市街地から南に約４～７㎞の距離にあり、市全域からみればやや南に位置している。標高では370～440ｍの間になる。東は天竜川を挟み下久堅・龍江地区に、南は久米川を挟み川路地区に、西は中位段丘から伊賀良地区に、北は毛賀沢川を挟み鼎・松尾地区にそれぞれ接している。天竜川は松尾地区までは広大な氾濫原を形成しているが、竜丘地区駄科から狭くなり、時又付近から再び氾濫原を形成しながら川路地区に至る。地区中央やや西寄りには、南北（松尾から川路へ）に走る断層により、比高差約30～50ｍの段丘崖があり、これを境に俗に「上段（うわだん）」と「下段（しただん）」と呼ばれている。地区内はおおよそ５面の段丘から構成される複雑な地形を呈するが、各段丘は毛賀沢川・新川・西沢川・駒沢川・臼井川・久米川といった天竜川の支流に開析され、より複雑な小地形を形成している。竜丘地区の中心は下段に位置するが、天竜川狭窄部で氾濫原がないため高燥した台地が多い。

開善寺境内遺跡は標高385ｍ前後で、南側は久米川の氾濫原に面しており、川に沿って東西に延びる低位段丘上に位置する。



第2図　調査位置及び周辺遺跡位置図

2．歴史環境（第2図）

竜丘地区においては、旧石器時代の遺跡は今のところ確認されていない。遺跡として確認できるのは縄文時代前期になってからである。

縄文時代前期では上の坊遺跡で断片的ながら後葉の土坑や土器・石器が確認されており、天竜川氾濫原から20m程の高所での人々の活動が知られる。中期には城陸遺跡・駄科権現堂（旧宮城）遺跡・前の原遺跡・安宅遺跡・駄科北平遺跡で集落址などが調査されている。城陸遺跡・駄科権現堂（旧宮城）遺跡は、飯田下伊那地方では数少ない狢沢式期～藤内Ⅱ式期を主体とする集落である。在地の土器に加え、中部高地・関東系・東海系・北陸系・関西系の土器が出土しており、当地の地理的条件を物語る。中期後葉では駄科北平遺跡・前の原遺跡で集落址が確認されており、前の原遺跡1号住居址出土土器は東海系が多い。後期初頭の駄科権現堂（旧宮城）遺跡の土坑出土土器もやはり東海系のものである。続く縄文時代後・晩期にかけての資料はほとんどない。

弥生時代においては、飯田下伊那地方では、その複雑な地形により大規模な水稲耕作にはあまり適さないこともあり、前・中期段階の生活痕跡は少なく、小池遺跡で条痕文土器が出土している程度である。遺跡数が増加するのは後期になってからであり、段丘上の高燥地にも集落が形成される。遺跡としては安宅遺跡・開善寺境内遺跡・小池遺跡・ガンドウ洞遺跡・大島遺跡等が挙げられる。墓制としては、後期に方形周溝墓が造られるほか、蒜田遺跡で貼石を持つ周溝墓が調査されており、また同遺跡には方墳の蒜田古墳がある。こうした墳墓形態は古墳時代にも継続することが近年の調査でわかってきている。

古墳時代においては、前期の集落の様相に大きな変化は見られない。中・後期の集落としては、前の原遺跡、安宅遺跡、ガンドウ洞遺跡などわずかな調査例のみであるが、古墳築造の背景として、相当規模の集落が複数あったと考えられる。古墳については、市内でも前方後円墳を中心としてその数は多く、前方後円墳9基、帆立貝形古墳3基を含む総数は、消滅も含めて140基余を数える。当地方の中期古墳築造は、当時の政治・経済にとって重要であった馬匹生産にかかわるものであることが近年の発掘調査で明らかとなっているが、竜丘地区の古墳はその中でも中核的役割を担っていたことが想定される。この状況は、後期に至っても塚越1号古墳・御猿堂古墳（県史跡）・馬背塚古墳（県史跡）にみられるような横穴式石室を有する前方後円墳の存在からも伺える。横穴式石室の多くは古くより開口し、出土品が不明である中で御猿堂古墳は画文帯四仏四獣鏡（重要文化財）の出土が知られており特筆される。

続く白鳳期には上川路廃寺跡の存在が古瓦出土から推察されている。また、奈良時代から平安時代にかけてのものとしては、古瓦・瓦塔破片を出土した前林廃寺跡、さらに上の坊遺跡で古瓦、宮洞古窯址群から塼仏が出土しており、古墳築造に替わって、新たな権力の象徴として複数の寺院建立がなされたことが想定されるが、これまでに寺院の調査事例はなく詳細は不明である。

集落遺跡としては、安宅遺跡や前の原遺跡で、これまでに奈良・平安時代の集落址の一画が調査されている。前の原遺跡の場合、時期・性格の把握が困難であったが、9×2間の身舎に3面に庇を持つ総柱建物址と、これに接して2列に並んだ柱列址が検出されている。また、良質な粘土と湧水に恵まれた段丘を開析する天竜川の支流に面した地域のなかには、斜面を利用して窯業生産が行われている。竜丘では駒沢川沿いには宮洞・河内ヶ洞といった須恵器生産の窯址群があり、前林遺跡のある段丘南側斜面には堤洞瓦窯址がある。

平安時代の末期～鎌倉時代には、古文書に伊賀良庄の地頭北条江馬によって現開善寺の前身開禅寺が開かれたとされる。本寺は幾度もの盛衰を繰り返し現在にいたっているが、室町時代に建てられた山門

は重要文化財に指定されている。

南北朝時代には、地区の北端の段丘先端に小笠原氏によって鈴岡城が築城される。毛賀沢川を挟んだ対岸の松尾城とともに小笠原一族の居城であったが、同族の争いにより最終的には深志（松本）小笠原から鈴岡城主が入ったが武田信玄の侵攻で落城する。武田一族も織田信長に敗れたが、その後信長も倒れ、豊・徳時代に入ると豊臣系の毛利秀頼が飯田城に入り、伊那全部を領有した。

江戸時代初期には、時又港が天竜川の水運を利用した飯田藩の江戸御廻米の舟出港として栄えており、その他煙草、柿等が青谷（静岡県磐田郡竜山村）などに向け送り出されていた。明治以降、鉄道が開通したことや道路改修が進んで運送馬車が登場して通船は縮小され、竜東や南部山地への物資の運搬等を中心に繁盛したが、明治40年代以降、橋梁が次々と掛けられたり鉄道が延長されたりして、徐々に衰退していった。

このように飯田下伊那地方は原始より東西の文化の交点として、古代には東国への玄関口として、近世以降は江戸および遠州への道として栄えた土地柄であり、その中でも竜丘地区は、古代から近代にいたるまで飯田下伊那地方の中心地の一つであったといえる。

第Ⅲ章　調査結果

1．遺跡の状況及び基本層序

今回の調査地点は、飯田市考古資料館の南側隣接地にあたる。考古資料館建設以前には梅林や農地となっていた。

今回の発掘調査は、同資料館の多目的トイレ建設に先立つもので調査範囲も限られていることから、隣接地での発掘調査で確認された遺構との関連を十分に把握できなかった。今回調査地点の北側に隣接する飯田市考古資料館建設に先立ち昭和48年に実施した発掘調査では、「表土下全面に堅い面があり、中世陶器片の出土をみる。」とあり、建物の土台等が確認されている。しかし、今回の調査では昭和48年の調査で確認された堅い面や建物址は検出されなかった。このことは、建物址が今回の調査地点まで広がらないか、後世の攪乱等によって削平されている可能性が考えられるが詳細は把握できなかった。

今回の発掘調査の基本層序は第5図A－A′・B－B′による。1層は現代の攪乱であり、2～5層までは造成土等、6層以下が遺構の覆土となる。調査地点の地山は24・25層で、24層がシルト質の黄橙色土、25層がグライ化した灰白色の砂質土となり、ロームは確認できない。

今回の発掘調査では、地表面からすべて手作業で掘り下げたが、2～5層については年代の根拠になる遺物の出土を欠き、遺構も確認されず、最終的には5層まで掘り下げた時点で遺構・遺物の確認に至ったことから5層下部を遺構確認面とした。現在の地表面から約1m下になる。

今回検出した遺構は、竪穴住居址1軒、土坑2基、溝址3条である。

2．遺構と遺物

（1）　竪穴住居址　（SB）

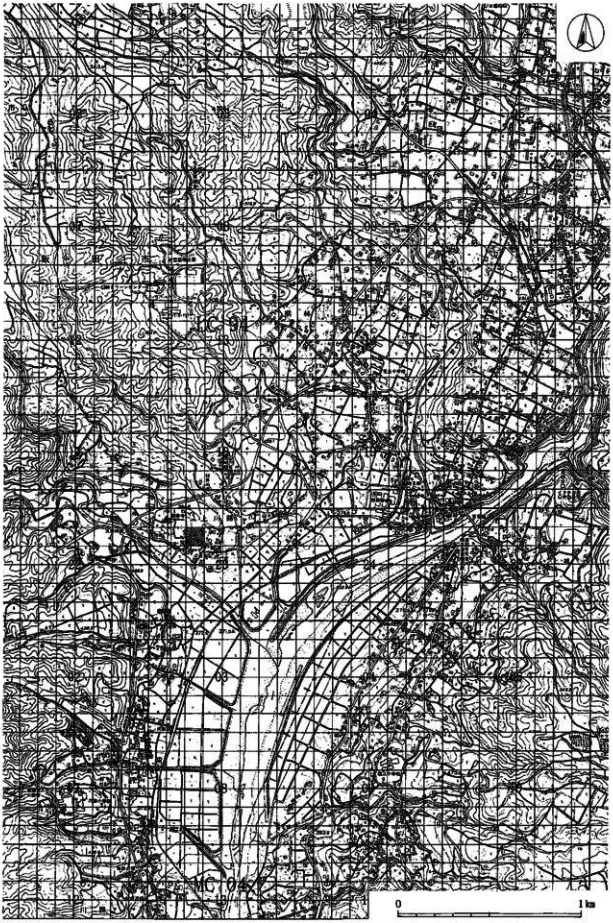
①　SB68（第4・5・6図　図版1）

遺　構　調査区の北側端で検出した。当初、本址の方を最も新しい時期の遺構と捉えて先行して掘り下げてしまったことから、断面観察（第5図A－A′）により本址はSD12に切られることを確認した。また、断面観察（同図B－B′）では、19層上面が本址の床面となるとみられ、東側壁が把握できる。しかし、西側はSK108・SD13が本址床面を掘り込んでいるため、規模・主軸方向及び住居址に関わる施設等については不明である。

遺　物　住居址の検出範囲が狭く、いずれも破片資料である。本址の覆土であるB－B′18層から出土した遺物を本址に伴うものとした。18層からは縄文土器片も出土しているが、土師器・須恵器の出土割合が多い。しかし、小破片のため図化できた遺物はわずかで、いずれも図化の1/8程度が残るのみである（第6図）。

土師器には、1・2の内黒杯、3の高杯脚、4～6の甕、7の単孔の甑がある。須恵器には、8の甕の胴部がある。

時　期　出土遺物が少なく、時期を特定し難いが、古墳時代中期末～後期初頭頃とみられる。



第3図　基準メッシュ調査位置図

（2） 土坑 （SK）

① SK107（第4・5図 図版1）

SD12の東側で検出した。本址は第5図A－A′6層の上面で検出したことから、SD12がほぼ埋没してから掘り込まれたものである。規模は南北40×東西40㎝、深さ35㎝で不整形を呈する。陶磁器片がわずかに出土しているのみで、時期の特定はできない。

② SK108（第4・5・7図 図版2）

SB68の西側で全体の1/2を検出した。SB68を切る後世の掘り込みの下で検出したため、SB68に伴うものか把握できなかったことから土坑とした（第5図B－B′参照)。よってSB68との前後関係も不明である。確認できた規模は東西60㎝、深さ45㎝で円形を呈するとみられる。土師器・須恵器破片がわずかに出土しているのみで、時期の特定はできない。

（3） 溝址 （SD）

① SD11（第4・5図 巻頭図版1 図版1・2）

SD12の南側壁に沿うように延びる溝である。検出時の状況からSD12が最終的にほぼ埋没してから掘り込まれた溝であると判断される。

本址の南側壁は堅く締まっており、SD12の壁を利用している可能性がある。この南側壁の上半部及び溝の外側には鉄分の沈殿が確認できる。確認できた長さは4m程度で、幅30～45㎝、検出面からの深さ70㎝で断面V字形を呈する。溝は東より約9°南東側に振った方向から延びてきて、約13°南西側に緩やかに曲がるとみられる。溝底は東側が高く、西に向かって緩やかに傾斜する。東と西の高低差は10㎝程度である。覆土は7.5YR 4/2 灰褐色土のシルト質で粘性はない。

本址の性格として、区画溝とするには幅が狭いが、本址の南側に鉄分が沈殿している状況や溝が南に向かって曲がることから南側一帯に本址にかかわる遺構が確認される可能性がある。

覆土からは縄文土器・土師器・須恵器・陶器小破片がわずかに出土している。周辺の状況や遺構上部の攪乱などの状況からみて、混入の可能性があり、本址の時期を特定できるものはない。

② SD12（第4・5図 巻頭図版1・2 図版1・2）

調査区のほぼ中央で検出した溝で、確認できたのは5m程度の長さである。SB68を切り、SK107・SD11に切られる。

覆土の土層は第5図による。本址は地山（A－A′24・25層）を掘り込んでいる。覆土の状況から、一度掘削された溝の半分程度を埋め立てて再度溝として利用していることが確認できた。以下、便宜上最初に掘削された溝をSD12－Ⅰ期とし、埋め立て後の溝をSD12－Ⅱ期とする（A－A′・C－C′)。

SD12－Ⅰ期の溝は地山（A－A′25層）まで掘り込んでいる。25層は砂質土であるが底部は堅く締まっており、壁は堅くたたき締められたような状態であった。北側壁面は底部から6層まで同じように堅く締まっていることから、Ⅱ期に新たに溝の幅を大幅に広げるような掘削はしていないと判断した。また、前述のようにSD11の南側壁面がSD12と共通であると考えられることから、溝の規模は、上端の幅1.7～1.8m、底部の幅1m、遺構確認面からの深さ1.3mで断面は逆台形を呈する。壁面は北側の方の立ち上がりは垂直に近く、南側の方がやや外側に広がる。底部の高さは調査区内ではほぼ同じである。溝の方向はN97°Eでほぼ東西方向にまっすぐに延びる溝である。北側壁面の上半部及び底部には鉄分

の沈殿がみられる。覆土最下層（A－A′12層）はグライ化した腐食土であることから、水がついた状態があったとみられる。Ⅰ期の覆土であるA－A′10層はシルト質の黒褐色土であるが、ほぼ均一に堆積していることから自然堆積ではなく、人為的な埋め立てによるものと考えられる。この埋め立て後、新たな溝として最利用される（SD12－Ⅱ期）。

SD12－Ⅱ期の底部はⅠ期の底部よりも65cm上になる。上述のとおり上端の幅や方向はⅠ期と同様である。遺構確認面からの深さは約0.7mで、底部の高さはやや西側が低くなるが、ほぼ平坦である。底部の幅0.9～1m、断面はやや崩れているが本来は逆台形を呈するものと考えられる。覆土下層は砂質土（A－A′9層）が互層に堆積することから水が流れた痕跡ともみられる。上層のA－A′7層は灰黄褐色砂質土に握り拳大の石が混入しており、その上の6層と共に人為的な埋め立てがなされた可能性があり、この時点で溝としての機能を失ったと考えられる。

溝の形態、意図的な2時期にわたる溝の継続使用などから、何らかの施設を区画する溝と考えられる。北側隣接地の調査では本址に対応する溝は確認されておらず、溝が区画する範囲が北か南かを判断することはできない。

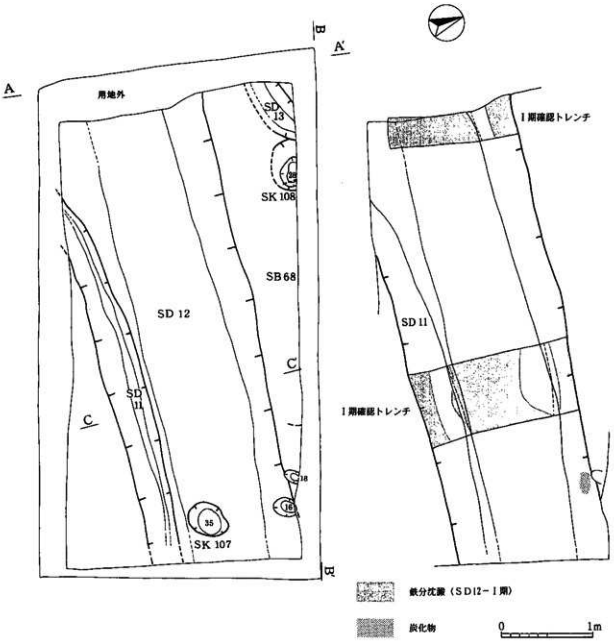
覆土からは縄文土器・土師器・須恵器が出土しているが、いずれも小破片のため図化できなかった。

出土遺物の傾向としては、Ⅰ期の溝址覆土であるA－A′10層からは古墳時代とみられる土師器・須恵器の破片がわずかに出土している。Ⅱ期の溝址覆土である9層からは土師器・須恵器破片が出土しているが、A－A′9層は砂層であり、遺物は周囲からの流れ込みの可能性が高い。A－A′7層からは縄文土器・土師器・須恵器破片のほか、灰釉陶器破片が1片出土している。A－A′6層からは土師器・須恵器のほか縄文土器破片や中世陶器も出土している。

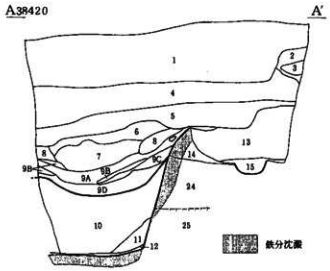
本址が古墳時代の住居址を切っていることなどから、上記の遺物が必ずしも本址の時期を特定できるものではない。本址の時期については延長部分の調査によらなければならないが、現時点では覆土の堆積状況や遺物からⅠ期が古墳時代、Ⅱ期が古墳時代から平安時代までの時期である可能性を指摘しておきたい。

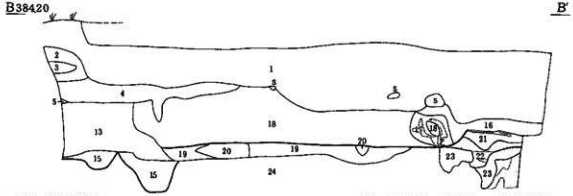
③　**SD13**（第4・5図）

SB68の西側で検出した。前述のSK108と同様、SB68を切る後世の掘り込みの下で検出したため、SB68に伴うものか把握できなかったことから溝址とした（第5図B－B′参照）。よってSB68との前後関係も不明である。確認できた長さは80cm程度、幅40cm、深さ20cmである。本址からの出土遺物はない。

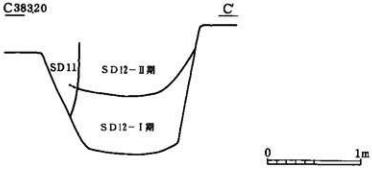


第４図　調査区全体図及びSD12平面図





1	10YR	3/1	黒褐色土			SiC	しまりあり	粘性あり	(後世の撹乱)
2	10YR	4/1	褐灰色土			SiC	しまりあり	粘性あり	
3	10YR	4/1	褐灰色土	小礫を多く含む		SiC	しまりなし	粘性なし	
4	10YR	3/2	黒褐色土			SiC	しまりあり	粘性あり	
5	10YR	3/3	暗褐色土			SiC	しまりあり	粘性あり	
6	10YR	4/3	にぶい黄褐色土	10YR 7/4	にぶい黄橙色土ブロック含む	SL	しまりあり	粘性ややあり	(SD11・SK107検出面)
7	10YR	4/2	灰黄褐色土	10YR 7/4	にぶい黄橙色土ブロック・振り事大の石含	SL	しまりあり	粘性ややあり	(人為的なものか)
8	10YR	8/8	黄橙色土	10YR 5/2	灰黄褐色土ブロック含む	SL	しまりあり	粘性なし	(人為的なものか)
9A	10YR	8/8	黄橙色土	10YR 8/4	浅黄橙色土を含む	SL	しまりあり	粘性なし	(泥砂)
9B	10YR	4/4	褐色土	10YR 2/2	黒褐色土ブロック含む	SL	しまりあり	粘性ややあり	(砂質)
9C	10YR	4/4	褐色土			SL	しまりあり	粘性なし	(砂質)
9D	10YR	8/6	黄橙色土			SL	しまりあり	粘性なし	(砂質)
10	10YR	3/1	黒褐色土			SiL	しまりあり	粘性あり	(人為的埋土・粘質土)
11	10YR	7/2	にぶい黄橙色土	10YR 4/2	灰黄褐色土との互層	S	しまりあり	粘性なし	(泥砂)
12	10Y	3/1	オリーブ黒色土			SiC	しまりあり	粘性あり	(グライ化した腐食土)
13	10YR	2/2	黒褐色土			SiC	しまりあり	粘性あり	
14	10YR	6/6	明黄褐色土	10YR 2/2	黒褐色土5%含む	SL	しまりあり	粘性なし	
15	10YR	2/2	黒褐色土	10YR 7/8	黄橙色土含む	SiC	しまりあり	粘性なし	(SD13・SK108覆土)
16	10YR	5/3	にぶい黄褐色土			SiC	しまりあり	粘性ややあり	
17	10YR	3/1	黒褐色土	全体に鉄分の沈殿あり		SiC	しまりあり	粘性なし	
18	10YR	2/1	黒色土			SiC	しまりあり	粘性あり	(SB68覆土)
19	10YR	2/1	黒色土	10YR 7/8	黄橙色土との互層	SiC	しまりあり	粘性あり	
20	10YR	7/8	黄橙色土	10YR 2/2	黒褐色土5%含む	SL	しまりあり	粘性なし	
21	10YR	4/1	褐灰色土	上面に鉄分沈殿あり		SiC	しまりあり	粘性あり	
22	10YR	4/1	褐灰色土	10YR 7/8	明黄褐色土ブロック・鉄分沈殿・炭化物含	SiC	しまりあり	粘性なし	
23	10YR	3/3	暗褐色土	10YR 2/1	黒色土15%含む	SiC	しまりあり	粘性ややあり	
24	10YR	7/8	黄橙色土			SL	しまりあり	粘性なし	(地山)
25	10Y	7/2	灰白色土			S	しまりあり	粘性なし	(地山・ややグライ化)



第5図　調査区土層断面図

（4） 遺構外出土遺物

① 縄文時代（第6図　図版2）

9は縄文を地文とし、浮線文を施す。前期末の十三菩提式土器とみられる。

10は深鉢の口縁部で図化の1/4が残る。S字状の屈曲をもつ平口縁の深鉢である。文様は、口唇部に刻みを施し、口縁部文様帯は半截竹管の集合沈線文によるものである。内面は丁寧なナデ調整がなされる。胎土には雲母・砂粒が多い。11～15も集合沈線文による文様構成をもつ深鉢の破片である。16は沈線の下に縄文が施されている。17はS字状の屈曲をもつ平口縁の深鉢で、口唇部に文様はなく、その下に波状の横位の沈線が施されている。以上は中期初頭の五領ヶ台式土器である。

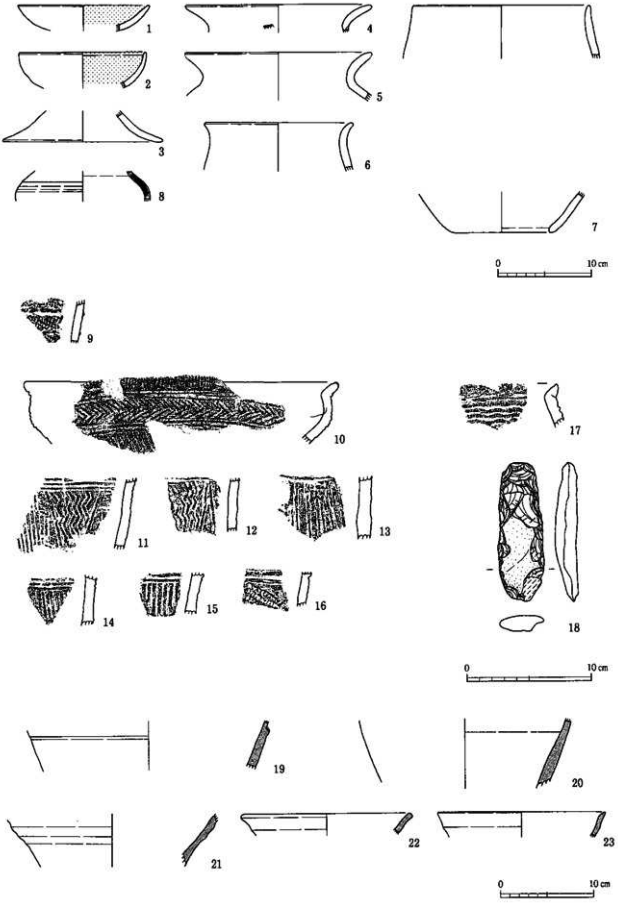
これらの土器は遺構検出面より上層から出土しているもので、遺構としては確認できないが周辺部に概期の集落があるとみられる。

石器には、18の硬砂岩製打製石斧がある。

② 中世（第7図　巻頭図版3）

調査区上層からは中世から現代までの陶磁器類が出土しているが、そのうち15・16世紀代の陶器が数片ある。今回、明確に開善寺に関わるとみられる遺構は確認できなかったが、開善寺は明応8（1499）年に被災し、伽藍のほとんどを焼失したとされ、この時期に関わる遺物もあり一部図化した。いずれも小破片の復元実測のため精度は劣る。

19は15世紀の古瀬戸後期様式の深皿、20は15・16世紀とみられる中国製茶壺、21は15世紀の古瀬戸の擂鉢で内面はかなりすり減っている。22は15世紀頃とみられる古瀬戸後期様式の直縁の鉢、23は15世紀後半の古瀬戸後期様式の平碗である。



第６図　SB68・遺構外出土遺物

第Ⅳ章　ま　と　め

調査範囲が極めて狭く、各遺構の時期・性格等を十分に把握できていない。そのため、ここでは今回検出された遺構・遺物の時期を中心に本遺跡内でこれまでに実施した発掘調査の結果と比較することでまとめとしたい。

これまでの発掘調査地点は第2図による。各地点の報告書は下記のとおりである。

A地点　昭和48年度　飯田市考古資料館建設　『開善寺境内遺跡発掘調査報告書』(1974)

B地点　昭和57年度　古瓦大量出土、下伊那歴史考古学研究所による発掘調査実施
　　遮那真周・遮那藤麻呂「伊那谷南部における初期仏教文化とその歴史的背景」『長野県考古学会誌』49号(1984)

C地点　平成元年度　上川路公民館建設　『開善寺境内遺跡』(1991)

D地点　平成11年度　市道建設　『開善寺境内遺跡』(2001)

E地点　平成13年度　県道改良　『開善寺境内遺跡』(2002)

F地点　平成16年度　個人住宅建設　『平成15・16年度　市内緊急発掘調査報告書』(2005)

1．縄文時代

今回の調査では概期の遺構は確認していないが、中期初頭の五領ヶ台式土器の深鉢片が出土している。遺構に伴うものではなく断片的な資料のため集落としての実態は把握できないが、近接地に概期の集落がある可能性は極めて高い。

これまでの本遺跡内での発掘調査では草創期～晩期までの遺物が出土している。ちなみに、C地点では中期中葉・後期・晩期、D地点では中期初頭・中期中葉末、E地点では草創期・早期前半・早期末～前期初頭・前期末・中期後葉・晩期の遺物が出土している。このうち遺構として確認しているのは中期の土坑3基であり、各時期の集落様相を把握するには至っていない。本遺跡の中心部は現在開善寺境内地となっているため調査がなされていないが、遺物の出土からみても境内地一帯が集落域の中心であるとみられる。しかし、南側の久米川に面した段丘端部（E地点）でも遺物が出土することから、集落域として利用が想定される範囲は遺跡内全域にわたるといえる。時期による集落変遷などは今後の調査によらなければならないが、出土土器の時期は断続的ではあるものの縄文時代ほぼ全時期にわたっていることから、概期における低位段丘上での土地利用を考える上で重要な遺跡といえよう。

2．古墳時代

今回の調査で検出したSB68と相前後する時期（中期～後期）の住居址は、これまでに実施した遺跡内各地点での発掘調査で確認されている。遺構分布もD・E地点での調査例のように、天竜川の支流である臼井川に面した段丘東端ないし久米川の氾濫源に面した段丘南端にまで及んでいることから、概期の集落が遺跡内に広く分布することがわかる。おそらく複数の集落が存在するものと考えられるが、現時点では把握できない。

竜丘地区のうち、開善寺境内遺跡のある上川路区は、横穴式石室を有する御猿堂古墳、馬背塚古墳といった後期を代表する前方後円墳が存在するほか、中期及びそれ以前でも本遺跡の一段高い段丘上にある上の坊遺跡や西の塚遺跡で先行する古墳や集落が確認されている。竜丘地区においても他の地区と同様、本格的な古墳形成は中期になってからであるが、前方後円墳の築造は当初から最終段階となる馬背塚古墳まで連続している。こうしたことから、地区内にはこれら古墳築造の母体となった集団の集落が相当数あると考えられるが、開善寺境内遺跡内で確認された集落もその一つとして古墳造営と連動しているとみられる。

また、当該遺跡は南側の久米川を挟んで川路地区と対峙する。川路地区と竜丘地区とは広域的に関連する動きをみせると考えられる。川路地区には、前方後円墳として久保田1号古墳があり、この古墳築造に際して既存集落の移動が想定されているが、川路地区に近い当該遺跡との関係は注意される。

3．区画溝の性格

SD12を区画溝と判断した理由としては以下の点があげられる。

① 断面が逆台形を呈し、ほぼ東西方向に真っ直ぐに延びることから、意図的に掘削された溝であると考えられること。

② 当初掘削した溝の半分を埋め戻して再度使用していること。

SD12の時期については、遺物の出土が少なく周囲の遺構からの混入が想定されることから、特定できなかった。調査範囲が狭く、区画する範囲及び区画される施設の性格等についても特定はできず、今後の周辺部の調査によらなければならないが、今後の参考のために周辺での調査事例等を整理しておきたい。

当該遺跡は、現在の開善寺境内地の西側でかつて白鳳期とされる軒丸瓦が出土したことから、古代寺院（上川路廃寺）の推定地となっている。また、布目瓦は昭和48年の飯田市考古資料館（A地点）や平成元年の上川路公民館建設（C地点）に先立つ発掘調査でも出土している。さらに、昭和57年に下伊那考古学研究所が実施した開善寺西側における発掘調査（B地点）では河原石積による基壇を確認したが、時期決定には至らなかったという。瓦の出土だけでみると、東西約200m、南北約100mの範囲に広がっているが、これだけで寺院としての実態を把握できるものではなく、現時点では伽藍配置や規模等は不明である。今回調査地の隣接地（飯田市考古資料館）では布目瓦が出土しているが、今回の調査では布目瓦は出土しておらず、区画溝としてのSD12と古代寺院との直接的な関係を特定する資料は確認できなかった。当該地は段丘の東側縁辺部に近いことなどからみて、上川路廃寺の中心部はより広い空間が確保できる現在の開善寺からさらに西側にかけての一帯と想定される。

開善寺は、明応8（1499）年に伽藍のほとんどを焼失しているため、現在残る最も古い建造物は重要文化財に指定されている山門である。焼失後再建された寺院の様子を描いたとされる開善寺古図によると、飯田市考古資料館及び今回調査地一帯は開善寺旧伽藍の東端の一画にあたり、古図には「梅宅軒跡」として建物があったことが記され、周囲は茶畑になっている。飯田市考古資料館建設に先立つ調査（A地点）では、中世とみられる建物址が検出され、火災痕跡も確認されている。今回の調査では上部が後世の攪乱を受けており、開善寺に直接関わる遺構や火災痕跡は確認されなかったが、15・16世紀の陶器が若干出土している。これら陶器はSD12の覆土上層ないし検出面よりも上層から出土しており、SD12廃絶後のものである可能性があるほか、SD12を西側に延長すると開善寺山門の北端にぶつかり、溝の

方向も開善寺の主軸方向とはやや異なることから、SD12は開善寺建立以前の遺構と考えることは可能である。SD12が最終的に人為的に埋め立てられたものであるとすれば、むしろ埋め立てが寺院建立に際して行われたとの推測もできるが、いずれにせよ今後の周辺での調査に待ちたい。

今後の調査の参考として、SD12と関連する可能性がある遺構について取り上げておきたい。

本遺跡内で区画溝と報告されているものに平成元年の発掘調査（C地点）で確認された溝状址１・２がある。今回の発掘調査で確認したSD12との比較のため、これらの溝状址についての記載を報告書より抜粋する。溝状址１は、「幅は1.8～2.1mを測る。（略）底部は穴状の凹みとなる部分もあるが平坦で北と東側での比高差もほとんど無く、タタキ状に締まっていた。壁面はこの底部から角度をもって立ち上がり、断面は逆台形を呈している。覆土は黒色土に石が多量に混入しているものが主体であり、ほとんど一気に埋まっているものと考えられる。」とし、時期は本址の底部から出土した陶器片から中世以降かとしており、開善寺に関わる道路址もしくは区画等の施設の可能性が考えられるとしている。溝状址２は、「幅２m、深さは45cm前後である。底部は凹凸があり、北から南へ15cm傾斜している。東の壁面は緩く立ち上がり、中段に稜を持つ、西は角度をもって立ち上がり垂直に近い部分もある。覆土は上部が黒色土、下層は漆黒色礫土で、いずれも一気に埋まっている。」とし、本址に確実に伴う遺物がなく、時期・性格は不明としている。溝の規模や断面形態、底部が平坦でタタキ状に締まっていたという状況から溝状址１とSD12との関連が想定されるが、底部の高さを比較するとSD12の最も深いところと比較しても溝状址１の方が１m程度低く、両者を一連の溝とするには問題もある。いずれにせよ、今後この区画溝は、この一帯の古墳時代以降の歴史事象を明らかにする上で重要な遺構となるといえる。

参考文献

小林達雄編　1988『縄文土器大観』3　小学館

小林達雄編　2008『総覧　縄文土器』 株式会社アム・プロモーション

遠那真周・遠那藤麻呂　1984「伊那谷南部における初期仏教文化とその歴史的背景」
『長野県考古学会誌』49号

飯田市教育委員会　1974『開善寺境内遺跡発掘調査報告書』

飯田市教育委員会　1991『開善寺境内遺跡』

飯田市教育委員会　2001『開善寺境内遺跡』

飯田市教育委員会　2002『開善寺境内遺跡』

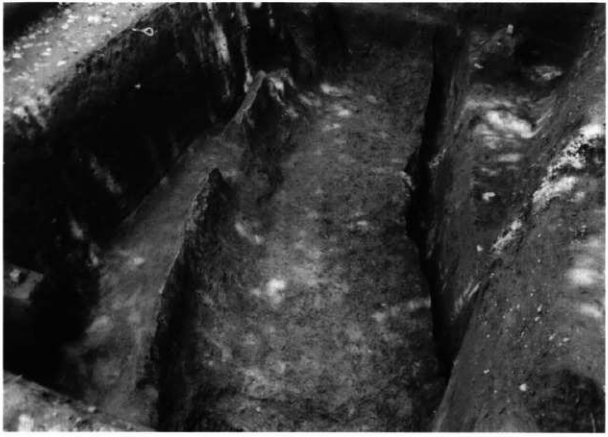
飯田市教育委員会　2002『久保田遺跡　久保田１号古墳　祓魔王塚古墳　その１　集落編』

飯田市教育委員会　2003『久保田遺跡　久保田１号古墳　祓魔王塚古墳　その２　古墳編』

飯田市教育委員会　2005『平成15・16年度　市内緊急発掘調査報告書』

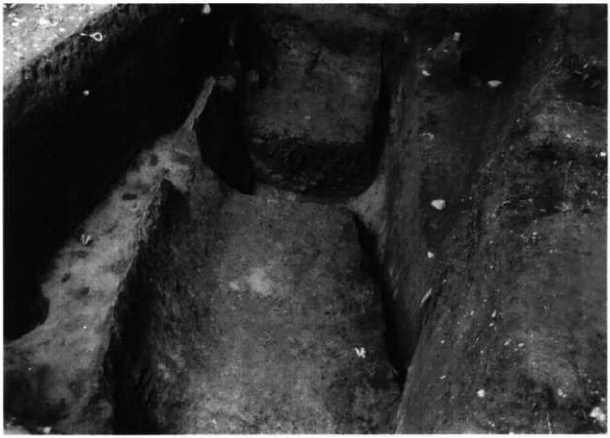
飯田市教育委員会　2007『飯田における古墳の出現と展開』

SD11（右）・SD12（左）

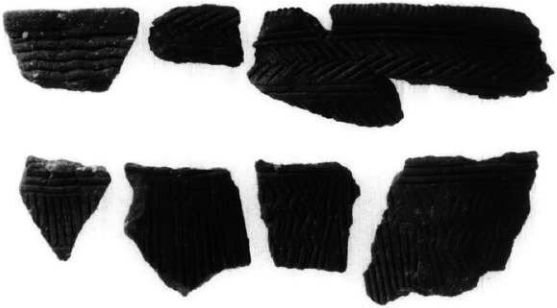


SD12－Ⅱ期

図版 2



SD12－Ⅰ期　覆土断面



遺構外出土土器

報 告 書 抄 録

ふりがな	かいぜんじけいだいいせき
書　名	開善寺境内遺跡
副書名	
巻　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	澁谷恵美子
編集機関	飯田市教育委員会
所在地	〒395-8501　長野県飯田市大久保町2534番地　TEL0265－22－4511
発行年月日	西暦2009年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
開善寺境内遺跡（かいぜんじけいだいいせき）	飯田市（いいだし） 上川路（かみかわじ） 1002－9	20205		35° 27′ 41″	137° 48′ 56″	平成19年 6月19日～ 7月18日	12㎡	多目的 トイレ 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特別事項
開善寺境内 遺跡	集落	縄文時代 古墳時代 中世～近世	竪穴住居址 土坑 溝址	縄文土器・石器 中世陶器	区画溝の確認

開善寺境内遺跡

2009年3月 発行

編集・発行　長野県飯田市大久保町2534番地
飯田市教育委員会

印　　刷　株式会社　秀　文　社